

天理外国語学校の朝鮮語教育にみる朝鮮布教の意義

金賻城(天理大学)

1. はじめに

天理外国語学校は、天理教二代真柱・中山正善によって大正14年(1925)2月17日に設立された。本稿の目的は、創設者の中山正善が海外布教師の養成を目的とした天理外国語学校を創設したことの意義を明らかにするとともに、日本宗教の中では唯一であった天理教の朝鮮語教育に注目しながら、天理外国語学校の朝鮮語教育からつながった朝鮮布教の意義を掘り下げて論じることにある。そのことによって、天理教の朝鮮布教における救済観の普遍性を明らかにしたい。

2. 天理外国語学校の設立背景

天理教における海外布教は、当時ブラジル、ペルー、ハワイ、韓国など世界各地へ渡った日本人の移民とともに明治期から行われた。初期の移住者たちは、商人や技術者が多く、そういった日本人の移住者を対象にしたことが多かった。この時期を「個人的海外布教」といい、韓国に関しては明治26年、釜山に密航布教をした布教師の里見半次郎によって代表される。ここで教派神道一派であった天理教の布教師が密航せざるを得なかった背景は、日本当局による植民地宗教政策に差別的取扱いがあったことにある。日本仏教や日本キリスト教のような既成宗教の活動は、積極的に支援していたが、天理教の活動に関しては徹底的に排除していたのである。要するに、韓国の文明化（あるいは近代化）をもたらすためという名分で植民地を進めていく日本政府にとって、迷信集団と取り扱いされた天理教の海外活動を認めるわけにはいかなかったからである。

一方、明治43年(1910)には日韓併合があり、海外布教の第二期とも言える「植民地布教」時代を迎える。続いて明治45年(1912)、神道、仏教、基督教による「三教会同」という協議会が設けられ、日露戦争後の国民の思想を統一することを目的に「国民教化」運動が国内で広く行われたが、天理教のような民衆宗教も国策に従う形で、協調せざるを得なかった。

ところで、大正8年(1919)3月1日、朝鮮の京城で万歳事件が展開され、これを機に朝鮮各地から独立運動が行われた。そして、同年10月10日、朝鮮布教管理所内に「朝鮮講習所」が開設された。

一方、こういう朝鮮半島における「文化統治」の推進に伴う情勢に応じて、天理教内信仰心に燃える青年たちは、「日本人が朝鮮人に対する軽視する態度は、我々には甚だしく不愉快きわまりない。」¹と国家に対する大きな不満を抱いていた。この批判の動きに、「天理教が朝鮮人の日本化を促す宗教になっては、朝鮮布教が失敗するに決まっている」²と韓国の信者たちも共鳴したのである。

¹ 天理教会本部，同胞主義の徹底，道友社，1919

² 崔禎鉉，朝鮮舊習の信仰から見たる天理教の價值(にほひかけ第4號)，1923

こういう動きは、大正 15 年（1926）、天理教朝鮮講習所主任に赴任した牧野榮一が、天理教機関誌が日本語で発刊されることに対して、韓国語の発刊を決意し、同年、7 月からすべての機関誌の言語を韓国語とする変化をもたらした。それは、韓国内布教活動が韓国語を基本にすべきであるという、改革派布教者たちの主張を背景にするものであったと推測される。さらに、天理教の信仰と植民地布教への考えの中で悩んでいた若き布教師たちが、日本政府の植民地言語政策に対して、どれだけ批判的姿勢を示していたのかが窺える。

この事件をとおして、天理教は海外布教活動における重要な方向性を再確認したことになると思われ。少なくとも、大正 14 年（1925）の天理外国語学校の設立と深い関係があったことは明らかである。まさに、この「朝鮮語運動」から天理教独自の「布教性」が生まれていくのであった。

3. 雑誌『金剛』と朝鮮布教の具体化

中山正善は朝鮮語教育を最も重要視し、朝鮮語部を開設したが、同時期の東京外国語学校では朝鮮語部が廃止になった。また大阪外国語学校では、開校時から朝鮮語部は開設されていなかった。当時の日本の朝鮮語教育では、「朝鮮語は外国語ではなく、方言であるゆえに朝鮮語教育は不要である」という認識が、文部省や教育界ではごく一般的であった。そういう背景もあって、日本における朝鮮語教育は、戦後になってから再開されることになる。

しかし、中山正善は朝鮮語教育の重要性について「一國の國語と云ふが如きものは、そう一朝一夕に變化すべきものではない。鮮語が滅亡するが如きことは、蔣来はいざ知らず近き蔣来に於いては、決してあり得べきことではない。」³と言及した。したがって、朝鮮半島の人々を救済する天理教の布教師は、朝鮮語を駆使することを基本とするのが創立者の思いであった。つまり韓国が日本と併合しても、韓国は朝鮮民族の国であり、朝鮮語を滅亡させることは決してあり得ない。朝鮮語を使った海外布教の形は、少なくとも中山正善の信念であった。

ところが、実際の教育内容に関しては、詳細を窺い知る資料の不足という難題を抱え込んでいる。ここで、参考になる資料を紹介したい。それは雑誌『金剛』である。

雑誌『金剛』とは、朝鮮語部の学生組織として形成された「金剛会」によって編纂された機関誌であった。ここで、「金剛会」は朝鮮語部在學生と卒業生（朝鮮半島の布教師）をつなげる組織である。さらに、雑誌『金剛』の内容から「天理外國語学校金剛会々則」が記されており、「本会ハ会費互ノ親睦信仰ノ向上語学ノ研究ヲ以テ其ノ目的トス」⁴と書いてある。つまり、朝鮮語の研究会や発刊のための研究活動が行われていたのである。

ところで、雑誌『金剛』は現在、創刊号と第 3 号が『金剛一・三号』と名付けられ、一冊として天理図書館に収蔵されている。記録によると、創刊号は昭和 7 年 9 月 1 日に発行され、第 3 号は昭和 9 年 12 月 15 日に発行されている。したがって、雑誌『金剛』は昭和 7 年から発刊されており、毎年 1 号が編集されていた。しかし現在、創刊号と第 3 号だけが保存

³ 天理教会本部，みちのとも，道友社，1925，15p

⁴ 天理外國語学校雑誌，金剛一・三号，奈良県丹波市町天理外国語学校金剛会印刷部，1932，97p

されているのみで、第2号をはじめ、第3号以降の出版物は現在、発見されていない。国内の状況や朝鮮半島の情勢から判断すると、その内容に深い関わりがあることが窺える。

創刊号は、前半部と後半部があり、前半部では、天理教団における著名人の文書と教理の朝鮮語翻訳本が掲載されている。続いて、後半部では、日本語で書かれた文書が大半を占めている。つまり、前半部の朝鮮語翻訳本と後半部が違う性格を持っている。後半部は文部省からの監督・検閲に引っかからない内容に構成されていたのである。内容としては、天理教の教理が溶け込んだ随筆文学であった。しなしながら、雑誌『金剛』の第2号は発刊されたことは確かであるが、その原本は残されていない。

第3号は、委員長であった北村七五三二を中心に昭和9年12月15日、発刊された。第3号は、創刊号とは違って表紙から目次までカラフルであったのが特徴的である。興味深いのは、掲載されている黄義東の「訓民正音」である。元々『訓民正音』とは、ハングル文字の根本的な本として国民に教える正しい音という意味で、朝鮮王朝4代王・世宗からハングルが創始された当初の名でもあった。

一方、昭和10年から天理外国語学校内で『朝鮮語教科書』の製作が進められたが、そのことは、朝鮮半島においてその姿を抹消された『訓民正音』が日本国内で研究されていた事実を物語っており、それは興味深いことである。『訓民正音』は当時、朝鮮王朝4代王が創始した文字ではないという憶測が広まり、「朝鮮語教育の禁止時代」において言及することすらなくなっていた。雑誌『金剛』第3号では、黄義東が『訓民正音』の創製者は朝鮮王朝4代王・世宗であると紹介している。

雑誌『金剛』を通して、天理外国語学校の「金剛会」（朝鮮半島の布教師の集い）が正しい韓国語で天理教の教えを翻訳する目的で研究しており、当時の朝鮮布教の具体化として実施されていたことが窺える。

昭和9年度に実施された朝鮮半島への修学旅行を記録した『海を越えて』の中に、昭和9年度の朝鮮語部の学生組織「金剛会」の委員長であった北村七五三二が執筆した「朝鮮の宗教と社会事業」という題名の報告エッセイが掲載されている。さらに、「本教の傳道、布教師養成を目的として建てられた天理教朝鮮布教管理所に在る天理教教義講習所と教化、社會奉仕を目的として建てられた落成して間も無い天理女兒學園である」⁵という内容から、大邱に「同慶會」という天理教の組織があり、その同慶會から朝鮮の布教師養成を目的に「同慶女學院」が設置されており、朝鮮の女性がそこで教育されていたことが窺える。社會奉仕を目的として建てられた「天理女兒學園」も紹介されている。天理教は日韓併合以降、激変する朝鮮社会において女性教育の必要性を呼び起こしていたのである。

4. おわりに

朝鮮半島において展開された天理教の布教活動をより深く理解するためには、この時期に行われた政治的な全体主義(帝国主義)に視線を置きながら、絶えず宗教的多元性の寛容に焦点を当てる必要がある。当時の諸宗教はそれぞれの世界観を示していないからである。固有

⁵ 天理外國語學校，海を越えて，天理教教廳印刷所，1935，165p

の信仰に基づいた宗教的な世界観は変質され、諸宗教の救済観は政府当局の政治的圧力によって衝突しない形に変容された。そのような状況の中、日本の異なる宗教の併存は許された。すなわち、日本的宗教における多元性の寛容が本来の宗教的文脈で意義づけられず、当時の政治的帝国主義に深く根付いていることが窺える。そのような状況において、天理外国語学校は「他民族の理解」と「他民族の救済」のために設立されたと言っても過言ではない。朝鮮語部を開設し、朝鮮民族を救済するために朝鮮語を駆使する海外布教師を育成する学校を設立したのは、日本宗教界でも天理教が唯一であった。朝鮮民族を理解するために、天理教参考館と天理図書館を設け、「帝国主義」に抵抗したのは、中山正善の教育理念そのものであった。朝鮮語部の「金剛会」が『訓民正音』を基に、天理教の教義を朝鮮語に翻訳するため、定期的に活発な研究に没頭していたことは当時の状況に注目すれば、極めて興味深い点である。それは学生たちの信仰に基づいた宗教的实践であった。朝鮮民族を救済したいという純粋な真心に感銘を受けた朝鮮の人々は、朝鮮の布教師となり、卒業生とともに朝鮮半島の布教活動に励んだ。京城にあった天理教朝鮮講習所では朝鮮語の教義書を用いて教育を行っていたことから、朝鮮語が使われたことが窺える。朝鮮半島における朝鮮語教育は朝鮮総督府に対する反逆行為であったことを考えれば、天理教の活動がそれだけに意義深い活動であったと言えあるだろう。さらに、朝鮮半島の天理教布教師たちが、社会的寄付活動を通して朝鮮社会に貢献したことも重要である。このことが、朝鮮の信仰者たちが戦後にも多数そのまま存続していた理由の一つである。戦後に天理教が朝鮮半島に存続できたもう一つの理由は、朝鮮語に翻訳された教義書が残存していたことであった。天理教は、当初から、朝鮮の人々の救済を目指していたが、他の日本宗教の海外布教と比較検討するとき、その海外布教の具体的な活動は朝鮮の人々にとって大きな社会的意義を持っていたと言えるだろう。

天理教の救済観を朝鮮語教育に融合させる教育は、天理教的海外布教という概念を自分たちの救済観のもとで意義づけることに成功した。とりわけ、天理教独自の海外布教が、天理外国語学校の朝鮮語教育と結び付けて、朝鮮布教が具体化されたことは特に注目すべき点であろう。つまり、天理教の救済観の普遍性はまさに朝鮮語教育を通して、朝鮮民族の救済を目的として実践されたと言えるだろう。

参考文献

李元範(1992)「日露戦争の宗教政策と天理教—『三教会同』政策をめぐって—」『宗教研究』294号。

芦名定道(2007)「多元的世界における寛容と公共性—東アジアの視点から—」晃洋書房。

奥村恵介(2017)「天理外国語学校」文芸社。

天理外国語学校(1935)「海を越えて」天理教教廳印刷所。

森井敏晴(1991)「天理教の海外伝道—「世界だすけ」—その伝道と展開」善本社。

天理外国語学校雑誌(1932)「金剛一・三号」奈良県丹波市町天理外国語学校金剛会印刷部。

天理朝鮮学会(1933)「名称録」天理教朝鮮布教管理所。

天理朝鮮学会(1920)「天理教教義講習所案内」天理教朝鮮布教管理所。